

飯島賢二の『恐縮ですが...一言コラム』

第 78 回 景気復調の裏で...ある金融マンOBの嘆き

昨年（2004年）の企業倒産の件数が、過去10年間で最小になったもようである。帝国データバンクによると、年間の企業倒産件数（負債総額1,000万円以上）は前年と比べ、約15%減の1万4,000件弱になる見込みである。（正式には1月20日発表）

企業倒産の件数は、2002年（平成15年）の1万9,458件をピークに、年15%程度の減少を続けている。2004年も1月から11月の合計比は、前年同期と比べ17.3%の減少だった。マスコミや学者、政治家たちは、こぞって、景気回復や企業の収益構造の改善効果を謳い、日本経済の復興の源を、我々が築いたと、尚更に自慢してくる光景が、目に浮かんでくる。

確かに、「悪い、悪い...」と言われ続けるよりは、ずっといい話である。マクロ的データを見る限りは、復調の兆しがあること、間違いない。しかしながら、今、我々が居るフィールド、中小零細企業は、相も変わらず、大変な状況であることに、なんら変化がない。

大企業を中心とした復調傾向が、中小企業にまで及ぶには、いつもの通りだが、タイムラグ（time-lag）がある。「もう少しの辛抱」というところで、必死に堪えている中小・零細企業が、如何に多いか、ご存知だろうか。

鳴り物入りで始まった、産業再生機構、不良債権処理を至上命令とした竹中政策の結果、報われたのは銀行だけ...？ 銀行業救済の為の施策を、国家的プロジェクトで推し進めていると見てしまうのは、弱者の「ばやき」に過ぎないのか。

おかげ様で、その恩恵にあやかっただ銀行業、体質的には何ら変わっていないし、他のどの業界よりリストラしていないし、給料減らずに業績過去最高。決算書の本質を読み取ろうとしない渉外係りが、したがって数字の判断はすべて、コンピュータによるスコアリング任せで平気、それどころか、あたかもそのみが教典の如く扱わせる、見事なまでの社員教育。数字以外の有益資源（人間性、将来性、知的財産評価、等々）の判断は、いやはや、それ以上にできない審査制度、自分が勝手に判断した担保価値を、一切誤りを認めず、「担保が足りないから」といって無理難題を押し付けてくる、ネクタイ・スーツは着用しているが、どこかの回収屋と錯覚する。「昔はバンカーと尊敬され、憧れたもんだが、いつからこんな卑しい商売人になってしまったのか...」80歳を過ぎた老銀行OBの話が耳について忘れられないでいる。

借りた金はきちんと返す...当然の大原則！それをできないで、「何とかお願いします」なんぞ、不届き千万！！おっしゃる通りである。でも、貸すのも、借りるもの、人間であること、歴然とした事実である。これで景気回復とは、世の中、寂しくなってきた。